

統合失調症療養者の親に対する社会的支援

- 親の語りを通しての一考察 -

立命館大学大学院
応用人間科学研究科
対人援助学領域
発達・福祉臨床クラスター
田野中 恭子

本研究の目的は、統合失調症療養者の親への有用な社会資源からの支援を検討することである。精神障害者施策は施設医療から社会復帰重視に移行しているが、地域の統合失調症療養者へのケアを家族が担っている。先行研究では、家族のケア上の困難に着目し、各学問領域で支援が検討されることが多かった。統合失調症療養者を支える社会資源は多様化しており、一領域だけの支援について論じるには限界がある。これまで社会資源の連携の重要性が述べられ、社会資源の利用と家族の介護負担感の低下との関連が定量的調査から明らかとなっている（一ノ山・村上・宮本・上野，2006）。しかし、社会資源の利用や社会資源の連携に関して、具体的にどのような内容が有用なのかを言及している研究は少ないため、親の語りを通して有用な社会資源からの支援を検討することとした。

方法は、書面による調査同意の得られた統合失調症療養者の親 5 名に半構造化面接を行った。佐藤（2006）の帰納的アプローチにもとづき分析を行い、さらに個々の事例検討から得られた社会資源からの支援を加え、分析の手がかりとした。

分析の結果、社会資源の関わりのカテゴリーを 12 個抽出した。発病時の親の戸惑いと職場・学校からの支援の格差、発病初期の医療従事者からの説明不足と親の学習時間確保困難、家族内外の理解不足と主たる介護者の孤立、治療拒否時の親による本人への対応、病状不安定時の親による受診支援と本人への対処、緊急時の医療従事者の介入不足、就業意欲と現状の齟齬への支援、ひきこもりと家族との衝突、就労に限らない社会生活の模索への支援、本人の自主性の尊重とケアの必要性との葛藤、親の介護者役割を担う過剰な負担、親亡き後の心配、である。

考察として、発病からの全過程において親は本人を支援しており、本人の治療と生活に関する社会資源からの支援ニーズとして、1) 継続的な家族への教育的アプローチ、2) 不安定な病状期における援助職からの家庭での病状把握と支援の提供、3) 慢性期における援助職からの日常生活の把握と相談、同行支援である。特に、発病当初や治療拒否時、症状悪化時には十分な支援がなく、親は本人の治療と生活を支えるために過剰な負担を担っていた。また親の生活をみると、親自身の戸惑いや孤立、家族内の衝突、ケアの葛藤等、家族の抱える困難を主に支えているのは家族会だけであった。今後、援助職による積極的な家族支援の検討が必要である。さらに、本人と親は医療だけでなく、心理・教育、生活、環境に関する多様なニーズをもっており、専門職は始めにそのニーズの全体像を把握することが重要である。専門分野で支援を区切るのではなく、他分野の専門性を取り入れたり、他の専門職につないでいくなどの社会資源間の連携が重要であることが示唆された。